



今から三十一年前の一九九五年一月十七日、午前五時四十六分に阪神・淡路大震災が発生。六千四百三十四人の尊い命が失われました。この土・日の新聞に記事が出ていたので、目にした人もいたのではないでしょうか。

今日は、今から約三百七十年前の明暦二年（一六五七年）の一月十八日から二十日まで

続いたという、「明暦の大火」についてのお話しをします。

この当時の江戸の町は、八十日も雨が降らず、カラカラ状態。おまけに北西の強い風（風速一千m級）が吹いていたのだそうです。

一月十八日、本郷の本妙寺で午後二時頃出火。一月十九日の午前四時頃、火が収まつたと思つたら、十一時頃小石川で再び火の手が。この火で、江戸城の天守閣・本丸・二の丸・三の丸も炎に飲み込まれてしまいます。

これで火の手も静まると思いきや、二十日の午後四時頃、麹町から三度目の火の手が上がり、江戸の町はほとんどまる焼けとなつてしましました。翌日二十一日は大雪となり、火災は免れたものの、今度は寒さで凍死する人が続出しました。

この時の死者は、十万八千人。一九二三年の関東大震災の時と同じくらいの死者の数でした。

この明暦の大火には不思議な話が伝わっています。話の内容はほぼ同じでも、登場する娘さんの名前や着物に関する記述が異なつたものがいくつかあるようです。東京消防庁のホームページには、おきく・お花・おたつの名前で紹介されていますが、今回は私の持っている本（『江戸名所の謎』雲村俊輔 PH P研究所）の記述をもとにお話しします。

梅のというお嬢さんが、菩提寺の本郷本妙寺のお参りの途中、寺小姓（お坊さんの世話ををする少年）とすれ違い、ひとめぼれをしてしまいます。両親に頼んで、寺小姓が着ていた着物と同じ、紫ちりめんで振り袖を仕立てもらい、その振り袖を着て、寺小姓に会いたい、会いたいと恋焦がれるうちに、食べ物が喉を通らなくなり、明暦元年（一六五五年）一月十六日に十七歳で亡くなります。梅のさんのご両親は寺に振り袖を納めます。この当時の習慣で、寺は振り袖を古着屋に売りました。その振り袖を買ったお春さんというお嬢さんも食欲がなくなり、明暦二年（一六五六年）一月十六日に十七歳で絶命。



実を言うと、こんな話も伝わっています。明暦の大火の火元は本妙寺ではなく、本妙寺のお隣の老中（幕府の偉いお役人）阿部忠秋さんのお宅。幕府の老中のお宅が火元とあつては幕府の権威が失墜するので、知恵伊豆と言わされた松平信綱さんが作り出した話が「振り袖火事」の話という訳です。

真相は何とも言えませんが、本妙寺は何のοとがめもなく巣鴨に移転して、現代まで続いているという事実をお伝えしておきます。君たちは家で火を使うということはないでしょうけれど、山火事も頻発している現在、火の元には十分注意してください。空気も乾燥しているので、耐寒マラソンが終わったら、うがい・手洗いをしっかりと、ウイルス対策として、のどの乾燥にも十分気をつけてくださいな。（立教小学校校長 田代 正行